

220-pm15

サジオモダカの塊茎の組織形態に関する研究

○高橋 直熙¹, 山路 誠一¹, 福田 達男², 池上 文雄³ (¹日本薬大, ²北里大薬, ³千葉大薬)

【目的】オモダカ科(Alismataceae)のサジオモダカ *Alisma orientale* Juz. は日本薬局方(日局)生薬『タクシャ(沢瀉)』の基原植物として知られ、使用部位は塊茎で、通例、周皮を除いたもの、と記される。サジオモダカは水辺に植生し根茎を形成する単子葉類であるため、全形生薬では輪節が認められる。しかし市場品タクシャは既に葉しょう(葉鞘)や根(不定根)が切除された後であることから、実際の利用部位は塊茎がどのように加工されたかの詳細はわかりづらい。そこで演者らは国内自生・栽培のサジオモダカを用い、葉鞘や不定根を去る前の組織形態を検討することで、生薬の利用部位の詳細を改めて検討した。

【方法】サジオモダカ試料は埼玉県内の自生状態品および神奈川県内の植栽品からそれぞれ地下部を伴って掘り起こし、地下部から、組織形態の検討対象外である葉鞘と不定根を最小限だけ塊茎表面に残したまま塊茎を切り出した。このものについて鏡検切片を作成した。鏡検では横切面のほか接線縦断面、放射縦断面などの試料切片を作成した。

【結果および考察】塊茎の最外層は葉鞘付近、不定根付近ともども表皮であった。表皮内部は皮層からなるが、皮層の柔組織は通気組織に分化した箇所が大半を占め、多くの空隙が認められた。また葉鞘や不定根に移行する維管束は柔細胞に囲まれた形で観察されたほか、明瞭な diaphragm(隔膜)が認められた。皮層の最内部は一層の内皮からなり、弱いスペリン化が観察された。中心柱は散在維管束からなり、試料により分泌道は明瞭なものと同明瞭なものが認められた。以上の観察により、生薬『タクシャ』で剥離していた部分は、内皮から外側の通気組織からなる皮層の部分で、周皮ではなく「皮部を除いたもの」であった。